

令和2年度

第4回

地域自立のための「人づくり  
・学校づくり」実践委員会

議事録

令和3年3月15日（月）

第4回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催時期 令和3年3月15日(月) 午前10時から12時まで

2 開催の場所 県庁別館8階第1会議室A、B、C

3 出席者 委員長 矢野 弘典  
副委員長 池上 重弘  
委員 片野 恵介  
委員 佐々木 敏春  
委員 里見 和洋  
委員 白井 千晶  
委員 豊田 由美  
委員 藤田 智尋  
委員 藤田 尚徳  
委員 星野 明宏  
委員 松村 友吉  
委員 マリ・クリスティーヌ  
委員 宮城 聡  
委員 森谷 明子  
委員 山浦 こずえ  
委員 渡邊 妙子  
  
知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 第3回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 才徳兼備の人づくり小委員会最終報告
- (3) 本年度の実践委員会及び総合教育会議の議論を踏まえた意見交換
- (4) その他

【開 会】

事務局： それでは、定刻となりましたので、ただ今から第4回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日は、お忙しい中御出席いただきまして誠にありがとうございます。

なお、本日、加藤委員、山本委員が所用のため欠席とのことでございます。

それでは、開会に当たりまして、知事より御挨拶を申し上げます。

川勝知事： 皆様、おはようございます。

この実践委員会は、令和2年度の最終回ということになります。

令和2年度は、矢野委員長の小さく生んで大きく育てるということでございまして、才徳兼備の人材をどのようにつくっていくかということで、まずは小委員会でしっかり検討しようということで、池上先生に小委員会の委員長をお務めいただきまして、精力的に研究といいますか、御活動を賜りまして、前回1月15日に、総合教育会議、これは法律で定まっております、教育委員会に首長が出て、そして県全体の地域ぐるみ、社会総がかりのこれを提言するというところでございますけれども、その席に、副委員長の池上先生に小委員会委員長として御報告を賜りまして、全面的に賛同を得た次第でございます。これからの高等学校をどうしていくかということ、それからグローバル人材をどうしていくかと、才徳兼備の人をどのようにつくっていくかと。こうした大きな3本柱で報告がなされました。それを踏まえまして、今回最終の取りまとめということでございます。この1年間、いろいろな議論を賜りましたので、そうしたことも踏まえて、次につなげていきたいと思っております。

今、この実践委員会は、大半の人たちが最初からずっと委員をしていただいておりますけれども、中には新しい人材に代わった方もいらっしゃいます。そうした中で、2年前のラグビーワールドカップというのが非常に大きかったですね。そのときの実践委員会の委員であった清宮さんに御提言いただきまして、ここで御賛同いただいて、総合教育会議に持って行って、そしてラグビーの文化普及に子供たちを巻き込むプロジェクトが進んで、結果的には静岡ショックということになりまして、これを、ラグビーを1回きりのイベントに終わらせるのではなくて、将来の人材育成につないでいこうということで、ラグビー聖地化検討委員会というのを作りまして、その座長を務めていただいている方が、清宮さんの後任として来られている星野委員でもございます。恐らく聖地化委員会の方でも相当話が進んでいるようでございまして、そうした話も今日承れば、我々が作り上げたラグビーの普及に関わる現在の状況なども知れるのではないかと思います。

そうしたことも含めまして、あるいは、白井先生は県の歴史の人口史で女性史を担当していただきまして、本当に圧巻で、800ページ以上の県の人口史としては日本で初めてです。これが数日前に出来上がってまいりまして、すごい中身なんですけれども、白井先生、そこにこうしたところでの知見も踏まえながら執筆していただいているお一人でいらっしゃいます。

様々な御活躍をしていただいておりますので、最終回でございますが、お昼までにぎにぎしく、また来年につなげるような実践委員会になればと期待しているところでございます。

何とぞどうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局： それでは、議事に入りたいと存じます。  
ここからの議事進行につきましては、矢野委員長にお願いいたします。

矢野委員長： 皆さん、おはようございます。  
お忙しい中、お集まりくださいますと誠にありがとうございました。  
Zoomがだんだん身近な道具になったおかげで、遠くの方もZoomを通じて参加していただいております。大変ありがとうございます。お礼申し上げます。

実践委員会がどういう位置付けであるかということは、何度もお話ししているんですけども、非常に大事な点だと思っておりますので、もう一遍、復習の意味で申し上げたいと思います。

新しい全国の教育方針で、各県に総合教育会議というのが設けられて、そこに首長も、県の場合は知事も参加することになっております。社会総がかりで子供たちの教育をしよう。本当に立派な目標だと思うのですが、それを実現するためにそういう会議が設けられたわけですが、知事は、自分一人の考えではなくて、本当に県を代表する各界の皆様の意見を聞いて、それを総合教育会議に反映しよう、こういう仕組みをつくったわけですね。それが実践委員会です。

こういう仕組みを持っている地方自治体は、実はどこにもないんですね。社会総がかりと言いながら、本当の意味での社会総がかりをやろうとしているのは静岡県でありますから、ぜひいろいろな意味で、県民の皆さんに役に立つ成果をつくり出したいと、こう思うわけです。

小委員会をつくったのは、その一つの目的に沿った施策であったわけですが、後で御説明があると思いますけれども、1年間の最終報告がまとまりまして、今後の教育の在り方について、どういう方向に向かうかということが示されておりますし、いろいろな意味で方向付けがなされているということが高く評価しているわけでございます。

そういう意味で、どうぞ皆さん、本当に遠慮なくいろいろなお話をいただければ、それをまとめて総合教育会議に反映して、そして実行に移したいと思っております。実行されなければ絵に描いた餅ですから、それではあまりにももったいないので、優れた皆さんの見識を生かしてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

では、まず第3回総合教育会議の開催結果についてでございます、1月15日に開かれた会議の様につきまして、池上副委員長に御出席いただきましたので、その内容についてお話をいただきます。

最初は「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」についてでございます、小委員会の報告については、この話が終わった後で、また改めて意見をお願いしたいと思います。

では、よろしく申し上げます。

池上副委員長： 池上でございます。

1月15日の第3回静岡県総合教育会議に、実践委員会を代表して、矢野委員長の名代として出席いたしました。その概要を報告いたします。

お手元の資料1、令和2年度第3回静岡県総合教育会議開催結果という資料を御覧いただけますでしょうか。

4の議事にありますとおり、「才徳兼備の人づくり小委員会中間報告」と「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」という2つのテーマについて協議が行われました。

このうち、私が今お話するこのパートでは、2つ目の方、「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」について御報告いたします。

前者の「才徳兼備の人づくり小委員会中間報告」に関する御意見については、後ほど最終報告の説明の際に併せて御報告させていただきます。

論点につきましては、7ページにありますとおり、第3回実践委員会、前回の私たちのこの会議でお示しした資料と同じものになります。それを総合教育会議でも御説明いたしました。

それに対する委員の皆様からいただいた御意見については、8ページに取りまとめてあります。私から、総合教育会議の場で、実践委員会ではこういう御意見をいただきました、と御報告いたしました。

さて、その1月15日の第3回総合教育会議で委員の皆さんからいただいた御意見は、2ページの下段からとなっております。かいつまんで御報告をいたします。

2ページを御覧ください。

2ページの下段にありますように、「均一性や同一性という観点をリセットして、出る杭をいかに多くつくるかという教育に変えていかなければならない」、「本物に触れる機会を多くの生徒たちに与える工夫が必要」といった御意見をいただきました。どうしても日本の学校教育というのは、均一な人材をつくっていくということにこれまで力点が置かれていましたけれども、そういった均一性・同一性を一回リセットして多様性を大事にしていく教育が大事だと。そのためには、様々な本物に触れる機会が必要だという御意見をいただいたわけです。

3ページに移ってまいります。

3ページ、1つ目の「情報機器等を駆使していくことで、教員の時間的、物理的、精神的な余裕が生み出されるので、その時間を生徒たちの個々の力を伸ばす教育に当てる工夫が必要だ」ということが言われております。今この会議もZ o o mで行っているとおり、情報機器が教育現場に急速に普及してまいりました。そのことによって、時間や気持ちの余裕といったものが出てくる。それを生徒の個々の力を伸ばす方向に使いたいということです。

3つ目の「生徒たちに自分を発見する機会をいかに多く与えるかが才能教育に欠かせないポイントだ」と。自分はどんなことができるのか、

何に向いているのか、これに気付いてもらう機会が大事だということです。

4つ目の「学力が高いことで参加できるプログラム以外にもっと多様なプログラムを推進していくことが必要」とあります。

下から3つ目、「自分で考えて自分で問題解決を図る子供を育てることが大事」といったような御意見をいただきました。

4ページに参ります。

4ページ、2つ目の「地域を越えて子供たちがお互いに刺激し合う枠組みを柔軟につくることができる」といい、4つ目の「生きた外国語教育が違う文化や環境、価値観に触れる機会を多く与えることになるので、グローバル人材を育てるといって強気に推進したい」、5つ目「英語圏以外の言語や暮らしに触れる機会を持つことが大事」、7つ目の「知事部局と教育委員会が連携し、補完し合いながら新しい高校の構想が実現していくことを望む」といったような御意見がありました。

地域を越えるというのは、これまではなかなか距離というのが大きな障害だったんですけども、それこそオンラインでつながるといふようなことも、今、教育現場では普通に行うようになってきました。また、静岡県はブラジルの方が多いいという点は、日本の中でも特色があります。ブラジル、フィリピン、ベトナム、中国、インドネシアといったような多様な人たちが身近にいる。こういう特色を生かしていく必要があるのではないかといい御意見だったかと思ひます。

会議全体を通じて、教育委員会の皆様に実践委員会の意見を受け止めていただきました。そして、基本的に同じ方向性を共有することができたと思ひております。

川勝知事からは、会議の総括として、6に記載のとおり、「具現化に向けて、それぞれの執行機関で責任を持って速やかに取り組んでいくようにしていきたい」といふ非常に力強い御発言がありました。

第3回総合教育会議の開催結果のうち、2つのテーマの後者の方、「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」について御報告いたしました。

以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

それでは、今お話のありました内容について、皆様からコメントがあれば、遠慮なく出していただきたいと思ひます。

松村さん、お願いいたします。

松村委員： 私は、地元の会社の経営者でございますが、地域連携といひますか、学校改革に地域の企業がどう関わるかということから申し上げますと、全ての企業は、少々余裕さえあれば、こういう時代は、人材教育のためにいろいろ汗をかくことは本当に前向きになっております。

そういう意味で、ぜひそれが具体的に何かのイベントに関わるのか、あるいは授業改革に我々が人材として入っていくとか、いろんなやり方があると思うんですけれども、少なくとも地域の企業として、あるいは、そこにはその学校のOBとか、たくさんいるわけですから、そういった人材をぜひ活用いただきたいと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。  
他にはいかがでしょうか。

山浦委員： 今、企業側からのお話をいただきまして、私は企業や地域と、学校をつないでいるコミュニティ・スクール・ディレクターもしております山浦と申しますけれども、キャリア教育の観点から学校に入らせていただいているんですけれども、企業さんたちがそのように考えてくださっているということで、すごく心強いというか、大変ありがたいと思いました。

やはり先ほどいただいた御報告の中にもありましたけれども、本物に触れるということに関しても、企業で実際に働いている方の話を聞くですとか、実際の機械を見せていただいたり、作業を見せていただく。それが、今学んでいる例えば数学の何かの単元とつながっているというようなことが、子供たちの腑に落ちれば、学ぶ力というのは、学びたいという力が増えるのではないかなというふうに思いますし、その場づくりをしていくというのが、私たちコーディネーターの役割かなということを非常に強く思いました。

イベントなのか、授業改革なのかというふうに今おっしゃってくださったのですけれども、イベントの方がやりやすいといいますか、職場見学とインタビューですとか、もうちょっとお手間をかけていただけるのであれば、体験をさせていただく。もし授業改革ということであれば、実際の最新の機器ですとか、最新の技術というのが、子供たちの学びとどうつながっているかということが、本当に分かりやすいような授業プログラムというのができれば、より子供たちにとっても、カッコいい大人を見ることにもなり、もっともっと学ばなくてはいけない、学びたいというふうになっていったらいいなというふうに今お話を聞いて思いました。

ありがとうございます。

矢野委員長： ありがとうございます。  
カッコいい大人を現場で見るというのは、素晴らしいことですね。先ほどの松村さんの御意見というのが具体化していくと、随分変わってくるんじゃないかと私は思います。

星野さん、教育の現場での御感想をお願いします。

星野委員： ありがとうございます。お願いします。

今、いろいろと本物を見せるというお話になったかと思えます。私も民間企業とコラボレーションをたくさんしているんですが、やはりちょっとウィン・ウィンの構図として厳しいかなと。持続可能になりづらい。それは、民間の方が教育にお付き合いしていただいているというところがあると思うんですね。幾ら未来への投資といってもですね。

私が今やろうとしているのは、例えば東京から来ている生徒も10%ぐらいおりますので、東京の企業とかではなくて、逆にむしろG A F Aとか、シリコンバレーとか、その辺と静岡の企業と我々教育、これが三位一体で例えば何かプロジェクトをやる。

そうすると、静岡の企業にとっては、東京を飛び越えてG A F Aとか、そういうところともいろんな知見を共有したりできると。やはりウィン・ウィンの仕組みが非常に重要なこと。G A F Aにとっては、日本の地域モデル、日本における静岡というのは、マーケティングの部分では非常に一番平均的なエリアですので、そういった日本のデータも取得できると。

こういう三位一体でウィン・ウィンになる形というのを考えないと、どうしてもやはり教育というのはお付き合いしていただく観点が強くて、疲れてしまうと思うんですね。

高大接続もそうです。大学の先生たちが疲れてしまうというケースがあると思うので、やはりそこが両方ともメリットがあるという仕組みをつくるのが大切かなと思っております。

私たちは私学なので、やはり一点突破で、公立の補完校ではございませんので、一点突破して、これが公教育でも生かせる、全面展開するというようなところを、私は一人でちょっと力み過ぎている部分はあるんですけども、今そういったことで校長という役職でやっておりますので、ぜひ皆様にもいろいろ知見等、共有させていただけたらと思えます。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

やはりそういう先進事例といいますか、良い事例というのが一番皆さんにとって影響が大きいと思うんですね。ぜひそういう試みは成功して、他の学校や地域の皆さんに影響を与えるように願っております。

ありがとうございました。

他にはいかがでしょうか。

それでは、ただ今いただいた意見の具体化について、今後検討を進めてまいりたいと思えます。

それから、先ほども申し上げましたように、小委員会の最終報告ができておりますので、その辺について池上小委員会委員長にお願いします。

池上副委員長： 続けて池上でございます。

このパートでは少し長めの報告になりますが、お付き合いいただければと思います。

才徳兼備の人づくり小委員会の最終報告に向けてということになるわけですが、まずその最終報告について説明する前に、1月15日の総合教育会議で2つ取り上げたテーマのうちの前者、中間報告についての御意見について、この場で御報告をしたいと思っております。

先ほども御覧いただきました資料1を御覧ください。

資料1の1ページの中段、ここが議題1になります。

かいつまんで御報告いたしますと、3つ目の「教員がどのような価値観を持っているのかをしっかりと把握することが必要」というところ、これは私たちの盲点でした。実はこの夏、生徒さん、それから企業の皆さんに対してアンケートを行って、大変興味深い結果が出たことは皆さんにも御報告をしたとおりです。ところが、一方の連携の当事者である先生方のご事情について、データを取るということをしていませんでした。先生方がどんなふうに関わることによって全然結果が違ってくるわけですが、その部分をしっかりと把握しなければいけないのではないかと御指摘をいただいたということ、ここでまず御報告します。

その下の「教員には学校で求められている業務が多いので、地域と連携した学びをサポートする役割の人が必要だ」といった御意見をいただきました。いわゆるコーディネーターの必要性ということになります。

2ページ目を御覧ください。

2つ目の「教員免許を持っていない民間のスペシャリストが授業を行った際の単位認定がどうなるのかといった問題がある」という問題提起をいただきました。様々なコーディネーターが学校現場で活躍するときに、その方がどの程度その授業に実質的に関わってくるか。それに伴って単位認定はどうするかという、言わば少し技術的な問題ですけれども、教育の質の担保という観点の問題提起です。

その下の「地元が無理やり残るようにするのはなくて、若者が静岡県に戻って来てくれるような仕組みをつくるのが大事だ」という御意見をいただきました。これは、知事が日頃からお話しされていることだと思います。

また、5つ目の「コーディネーターをどこで探し、どのように育成していくか」ということは、集中して考えていかなければならない課題の一つ」という御意見がありました。その下の「既に取り組んでいる良い実践例を一目で分かるように紹介していくとよい」、またさらにその下、「地域の側から発掘したコーディネーターと学校のことをよく知っているコーディネーターが二人三脚でつないでいく形ができる」とよい、さらに下には「高校と企業の連携による成果を企業側から経済団体の集まりの中で発表する機会があるとよいのではないかと」という御意見をいた

できました。

この総合教育会議における御意見や実践委員会で皆様からいただいた御意見を踏まえて、1月25日に小委員会を開催しました。そこで最終報告をまとめた次第です。

それでは、引き続き小委員会の最終報告についての御説明をいたします。

資料2と資料3になります。

まず、資料2を御覧いただければと思います。資料2は最終報告の概要となっております。次の資料3が最終報告の本文というふうになります。

構成といたしましては、中間報告では、IVの中で「取組を確実に進めるための方策」を3としていましたが、独立させて、V、「効果的に施策を進めるための方策」として、より詳細に記述をしております。

その他の構成は特に変更ありません。資料3の最終報告の本文は、小委員会での議論、総合教育会議や実践委員会における御意見を踏まえて、中間報告を文章化したものとなっております。皆様からいただいた御意見は、この中に書き込む形で取り込んでおります。

資料3の表紙を見ていただきたいと思いますが、今年度の議論の内容が分かるのとおり、副題を付けました。「地域と連携した特色ある学校づくりに向けて」という副題が付いております。

それでは、1枚物、表裏の資料2を基に概要を御説明してまいります。

まず表側です。I、社会変化の状況やニーズ調査の結果など、高等学校教育の在り方について議論する上での背景について記載した上で、IIで、本県の高等学校教育における課題を4つの項目で整理いたしました。1ページ表の真ん中の下の辺りです。

次のIIIでは、高等学校を取り巻く状況や課題を踏まえて、高等学校教育に求める姿を記載しており、求める姿を「次代の担い手の育成」とあるというふうにしております。

次のページに行きまして、IVです。「静岡型高等学校教育の実現に向けて取り組むべき施策」といたしまして、求める姿を実現する上で必要となる施策や具体的取組をまとめています。これは、言わば報告の本体部分ということになるわけです。

まず1、「基本的な施策の方向性と取組」を「地域の実情を踏まえた特色ある教育の実施」と「地域との連携強化に向けた学校の運営体制の改善」としております。

学校外の様々な教育資源を活用した特色ある教育の実現、普通科改革や特徴ある学科の設置、地域と連携した活動の単位認定、外部の多様な人財が関わる仕組みの構築、地域連携活動を行う生徒が評価される仕組みの導入といったことを提案しています。つまり、それがちゃんと学校の中で仕組み化されて、継続性を担保していくためにはどうすればいい

かというところで、単に地域と関わりたいというお題目だけではなく、もう少し踏み込んだ体制づくりについて提案をしているわけです。

2のところ、「基本的な施策を進める上で必要となる具体的な取組」として、「地域資源や情報のプラットフォーム構築」、「コーディネート専門人材の育成・配置」、「学校と地域の連携・協働を進める教員の育成」の3点について、より具体的に提案をしております。

具体的な取組としては、多様な主体の連携組織による取組の実施、教育現場と外部人材が交流し学び合える場の設置とともに、それをコーディネートする人材を確保して、機能させていくための必要な取組などを提案しております。

一方で、学校と地域の連携・協働を進める上では、やはり教員側がやりがいを持って関わるというふうにしていくことが求められます。教員に対する研修や教員同士の情報共有、教員の業務改善、大学における教員養成といったことなどについて提案をしております。

次にVです。最後のパートになります。ここは「効果的に施策を進めるための方策」としてありますが、中間報告の後、議論に時間を割いている部分でもあります。

取組の進め方につきましては、短期、中期、長期の課題に分けて、可能なものから実施するとともに、モデル校での取組を通じて全県的な取組へ拡大していくとしております。

後ほど事務局から改めて御説明があると思いますが、小委員会におきましては、来年度も引き続き、このモデル校による取組の状況を確認しながら、モデル校での取組の改善事項や中長期の取組の方向性等について議論を重ねて、来年度の実践委員会へ提案していく予定でおります。

また、施策の実現に当たっては、大学、企業、市町、関係団体等を含めた社会総がかりの取組の必要性についても指摘をしております。

ここで、最終報告の本体資料、資料3の13ページを御覧いただけますでしょうか。A4の横長になっている部分です。

これは、今後の進め方をイメージして整理をしております。短期的取組、中長期的取組と分けてありますが、短期的取組は、令和3年度にモデル校による取組に着手、効果等を踏まえて取組内容を改善しつつ、全県的な取組に拡大していくとしております。具体的には、来年度、教育委員会において、新規事業として、モデル校を選定し、協議会の設置やコーディネーターの配置などに取り組むと伺っておりますので、私自身も非常に期待をしております。できれば、その幾つかには実際足を運んでみたいなと思っております。

この表3の右側では、中長期的取組を実施課題と検討課題に分けております。検討課題は、制度的な検討が必要なもののほか、県や県教育委員会が自ら行う取組ではなく、大学や企業等に検討、実施をお願いしていくものというふうになっております。

今回の報告の中では、学校と外部をつなぐコーディネート機能の必要

性について指摘をしておりますが、既に学校や地域と連携した活動を実施している団体が県内にもあります。モデル校による具体的な取組を進めていく上で参考になろうかと思えます。小委員会の中でも事例を取り上げておりますので御紹介いたします。

この同じ資料3の資料編になります。後ろの方、44ページを御覧いただけますでしょうか。

資料11となっているところですが、まず一般社団法人シヅクリさんです。学校を退職された方が立ち上げた団体です。学校への働きかけや企業への協力依頼、学校と企業との調整などを行って、中学・高校で探究プログラムを実施するとともに、成果報告、成果発表会を行っております。つまり、こちらの団体は、学校の中をよく知っている方が地域とのつなぎ役をやっているという性格の団体になります。

次のNPO法人のしずおか共育ネット、これは小委員会の井上委員が代表理事を務める団体です。高校におけるキャリア教育や探究学習のコーディネートのほか、高校生の活動発表会や教員向けの勉強会などを行っております。

次のページ、45ページですが、NPO法人のキャリア教育研究所ドリームゲート、今日はZoomの画面の向こう側にいらっしゃいます山浦委員が代表理事を務める団体となっております。小学生に対するキャリア教育プログラム、高校におけるキャリア教育のコーディネートなどを行っております。

以上のような先駆的な団体が既に静岡県内にはあるということです。学校と地域が連携した取組を具体化していくためには、このような団体との連携も考えられると思えます。

教育委員会におきましては、今回の小委員会の報告の内容を受け止めていただいて、地域との連携をより一層深めることで特色ある学校づくりを推進し、次代の担い手の育成を進めていただければと思っております。

少し長くなりましたが、私からの報告は以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

続きまして、来年度の小委員会の進め方につきまして、事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明をいたします。

資料は、ただ今御説明をいただきました最終報告の次の資料4になります。

才徳兼備の人づくり小委員会の進め方の案となっております。

来年度の小委員会は、今年度と同じメンバーで、2の協議事項にありますように、地域と連携した高等学校教育の在り方について議論を深めていただきたいというふうに考えております。

先ほど池上副委員長からもお話がありましたとおり、モデル校での取組の改善事項ですとか、中長期的な取組の方向性などのほかに、加速する人口減少を見据えて、教育の質の確保という視点から、魅力ある高校づくりのための方策について御提案いただきたいというふうに考えております。

小委員会からいただいた御提案につきましては、3の提案内容の反映にありますとおり、実践委員会や総合教育会議での協議を経て、具体的な施策に反映していきたいというふうに考えております。

具体的な進め方ですけれども、4の年間計画にありますとおり、先ほど池上副委員長からもお話がありました学校視察のほかに、年間5回程度の会議を行いまして、今年度と同様、実践委員会へ中間報告、最終報告を行っていただくことを想定しております。

小委員会の委員の皆様には既に御了解をいただいておりますので、本日、皆様から御了解をいただきましたら、池上委員長の下で、このような形で進めていただきたいというふうに考えております。

説明は以上でございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

報告の内容といい、今後の進め方といい、お話やまた資料で感ずることは、随分知らないことがいっぱいあるんだなということですね。いいことがなされているという芽が、そういうふうに生まれ始めているということを感じます。

ぜひ皆さん、お忙しい中で来年度もまたお願いすることになっておりますが、よろしく申し上げます。

では、ただ今の最終報告と進め方について、皆様から御意見をいただきたいと思っております。

豊田委員、申し上げます。

豊田委員： ちょっと質問になるんですけれども、モデル校の取組を今後やっていくというところで、このモデル校の中に特別支援学校の高等部というのは入っているのかどうかというところなんですけれども。私、ちょっと障害者の雇用の方もやっておりまして、就労支援の方をやっておりまして、特別支援学校からの依頼というのもあるんですけれども、なかなか地域連携であったりとか、事業所との連携であったりとか、通常の高校よりは実習とか体験とか多いんですけれども、最終的な出口のところ結構行き詰まってしまう方が多いので、ぜひモデル校をこれから選定するようであれば、特別支援学校もこのモデル校の中に入れていただけたらと思います、ちょっと御意見の方をさせてもらいました。

もし入っているということであればいいんですけれども、まだその辺、これからということであれば、特別支援学校も県内に何校かありますので、どこか1か所、就職というところに、最後の最終的な出口に向

けて取組の方を行っていただきたいなと思ひまして、ちょっと提案と質問になります。

お願いいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。  
池上先生、何かモデル校の選定について御意見があればお願いします。

池上副委員長： モデル校については、私がお話するよりも、むしろ教育委員会側で、高校教育課でお話いただいた方がいいかなと思いますが、いかがでしょうか。

矢野委員長： そうですね。では、教育委員会の方で、どなたか説明していただけますか。

事務局： 高校教育課学校づくり推進室長、花崎でございます。  
現段階でモデル校を選定中ではございまして、現段階では、特別支援学校の高等部、今モデル校の指定は考えてございせんが、まだ余地があると思ひますので、そのところは特別支援教育課と協議をしたいと思います。

矢野委員長： よろしいですね。内容が決まりましたら、また改めてこの場でも御説明できると思ひますので、そういう機会をつくりたいと思ひます。  
ありがとうございます。  
他にはいかがでしょうか。

クリスティーヌ委員： ずっとお話を聞いていまして、非常にまとまりがよくて、私自身もすごくよくできたなんていうと、非常におこがましい言い方ではありますが、皆さんプロですので。

ただ、ちょっとだけ気になるところがありましたのが、先ほど話がありましたように、出る杭をいかに多くつくるかということの中で、出る杭が打たれるということのイメージがちょっとネガティブな感じがするので、説明があつてから、出る杭が打たれることは、今まではよくないと思われていたけれども、こういう人たちが社会に必要なんですみたいなことが出てくると、出る杭が打たれる人材を育てようというのと、えっという感じがしますので、そのところは私の解釈がちょっと違うのかもしれないですけども、どうなのかなと思つたのが一つと、あともう一つは、今の話の中で、特別支援学校とか、そういうところの中でも、私、今、東京女子大学で教えている中で、何人か静岡県の方々も来ているんですよ。本当にびっくりするのは、新幹線朝早くに乗って、家から通われている方もいて、今は本当にこのようにコロナになったも

のですから、Zoomでできるから、彼女らにとってもよかったなと思うんですけども、気になるのは、やはり性教育、私ジェンダーを教えていますので、結局LGBTとか、ジェンダーとか、あと性教育というものは、ある意味では学校の中できちんとまだ教えられていない中で、やはりこれは地域の中でもそういうことをきちっと伝えていかないと、最近非常に低学年から子供たちが、特に先進国である日本という国の中でも、HIVに感染している小学生が、先進国の中で日本が非常に高いんですね。というのは、結局そういう性教育についてのいろんな皆様方の考え方があって、学校で教えることではないとか、または家庭で教えるべきだとかということの中で、私がびっくりしましたのは、大学生の中で、こんな性の話は聞いたことなかったですと。もっと低学年で、小学校のとき、中学校のときに、こんなことを知りたかったですというコメントが来るものですから、非常に大事なことで、特に国連、人口危機の中でも非常に進めているのは、きちっと自分を守り、そして今人口が非常に増えている地域が発展途上国で、減少しているのが先進国であるわけですから、そういうことも含めて、もう少し幅広い教育も、そういうコミュニティの中でもきちっとできるようにして差上げられるような仕組みが、この中に含んでいただけたらいいなと思ったので、ちょっとここで発言させていただきます。

矢野委員長： ありがとうございます。

レポートの中にある出口ということについての説明は池上先生にお願いしたいと思いますが、ジェンダーの問題とか、そういうテーマを今後教育委員会としてどういうふうに取り上げていくのかということについて、お考えがあれば、どなたか最初にお話しいただけますか。

山浦委員： 今の性教育に関してで、私は小学校とか中学校にもコーディネーターとして入らせていただいていますので、自分が知る限りにはなるんですけども、小学校でも、思春期講座のようなことは5、6年生でやっていますし、自分の娘でも、学校でもちゃんと話を聞いてきてまして、中学校でも1年生、2年生、3年生それぞれに思春期講座を発達に合った形で行っています。

3年生のときには、特に巢立ち講座といいますか、卒業前に改めて性教育というのをやっているのをここ数年見ておりますので、多分やっていることはやっていると思うんですけども、その生徒さんの地域がどこなのかということも、学生さんの地域にもよりますし、あとは、子供たちはどうしても学校で受ける授業だと、もう給食の後とかだと眠くなってしまったりですとか、学校で受けるものを右から左に受け流すという特性もありますものですから、受けていても忘れてしまっている可能性もなくはないかなと思ったのが1つと、あとはやはり家庭の中でオープンに、悪いことではなくいいことだという、親がそういう概念で子供

の発達に合わせて一緒に考えてみるとか、一緒に話し合ってみるという場が、親子でできるのが一番の性教育かなと私的にはとても思っています。

失礼しました。

矢野委員長： ありがとうございます。

来年度のいろいろな論議の中でまた改めて取り上げるということも可能だと思いますが、どういう実情にあるのかということについては、知らない、知られていないことが多いかもしれませんね。そういうことに問題を絞ってまいりたいと思います。

出口の問題というのは、レポートを読むと、高校を卒業した後の進路の問題なんでしょうかね。

池上副委員長： この小委員会において、「出口」という言葉が使われているのは、高校はしばしば、要するに進学とか就職とか、そういう高校を終えた後のその先のことに意識が向き過ぎていて、高等学校で学んでいる3年間の間により広く、直接進学とか就職に結び付かないかもしれないけれども、深い学びができるような地域との関わりという観点があまりなかったのではないかという問題提起をしております。

概要資料のⅡの1、高等学校に求められる役割のところ、**「出口」**のみを目標とした学習ではなく、様々な課題に挑む力等を育む教育が必要だと書いてあります。ですから、そんな地域と関わっている暇があったら英単語を覚えなさいという発想ではなくて、あるいはそんな時間があったら数学の問題を解きなさいという出口直結ではなくて、先ほども山浦さんのお話でもあったかなと思うんですけども、例えば地域に出て、ある工場で働いている人の話を聞くと、なるほどサイン・コサイン・タンジェントというのはこういうところで生きてくるのかというふうに分ると数学の勉強に身が入ると。

逆に言うと、私の個人的な話ですが、全く数学に関心が持てなくて、サイン・コサイン・タンジェントのところ、何で今俺がこれを学ばなきゃいけないのかと、その必要性が全く理解できなくて、その部分がすっかりと抜け落ちてしまっています。

ですから、出口のみを目標とした学習、前にも言ったと思いますけれども、受験勉強と地域との関わりは二項対立で、どちらかをやればどちらかがなくなるというのではなくて、地域との関わりの中で教科学習に対する関心も高まっていくと考えます。教科学習で学んだことが現場に出たときに現場で生きて、なるほどこういうふうに生きるんだというような、その相互作用というか相互的な往還、行って戻ってくるですね、相互的な往還の中で高校での学びは深まっていく、問題意識が深まっていくと、そんなイメージを私たち小委員会は持っております。

矢野委員長： ぜひ論議を深めていただければ大変ありがたいと思います。  
片野さん、どうですか。

片野委員： 前回、自分は人文科学科の学生の話などをさせていただいたんですけど、今、出口という話もありましたが、その前にマリ先生のおっしゃられた出る杭の話からさせていただきます。

要は今までの画一的な教育を一回リセットして、多様な学びの中で自分が何をしたいのかということ気付かせるような、そういう教育を企業と一体となって子供たちに気付かせてあげる、学びの場を提供してあげるといような形をつくることはすごく大切なことではありますが、私の考える出口というのは、では好きなことをやっていて最終的に自分はそのもので食べていけるかどうか、生活していけるかどうかということが一つ大事なことになるわけなんです。

義務教育を中学で終了した後は、あとはもう自由に就職することもできますし、さらに学ぶこともできます。高校、大学となって何を学ぶのか。端的に言えばリベラルアーツというんですかね、自由に生きる技、そういうものを高校からは学んでいく。自分が将来にわたって自由に生きられる、そういう技を磨く、学ぶ、その場が高校、大学ではなかろうかと自分自身は思っております。

そういう中で、即戦力となる人たちというのも、私は酪農をやっていますので、そういう子たちを欲しているわけですけども、翻って、例えるならば、お医者様が命を救っております。しかしその背景にはもっと多くの命を救っている研究者の皆さんがいます。そして、人文科学の世界でいえば、政治家の皆さんが平和を維持しているように表面上は見えますけど、その裏で研究、人文科学の哲学を学んでいる人たちが平和を支えている。そういう方々が、実は若手の研究者たちは非常に生活に困窮しているという話をよく聞きます。杭もそれこそ伸びてはいくんですけど、どんどん下げていく。そして最終的にはその杭が折れてしまう。

そうなってしまったら身も蓋もない話です。最初からそんな自由に教育なんていう話はせずに、画一的に生活ができるような、そういう教育をしていけばいいわけですよ。でもそうしたら、社会全体がもう破綻します。

そうならないためにも、自分たちがやりたい、例えば論語をずっと研究していきたいんだ、そういう子たちが、そのままずっとそれを研究できるような、そういう社会に、これは県単位ではなくて、もう日本国全体で考えなければいけないことなんですけれども、そういうふうな出口を示していかなければ、もう若手の研究者は育っていかずに、途中でそれこそ公務員になったり、また企業に就職して自分の研究を諦めてしまうと思うんですよね。

そういうふうなことにならないようなことを、この静岡県がいち早く

気付いて行動に移せるような、そういうような何かアイデアをこれから見出していったらなというふうに僕は思います。

長くなって取り留めのない話になりましたけど、以上になります。

矢野委員長： 目立たない基礎研究、そういうところにもっと力を注ぐべきではないかという御意見でしょうか。割とすぐ世の中に役に立つようなことについての主張というのはよくありますけど、その背景にあるいろいろな基礎的な研究、そっちにもっと力を入れるべきだという御意見と考えていいですか。

片野委員： 先ほど冒頭で言った出る杭をいかに多くつくるかという中で、その杭の一本一本には、もちろん私自身の酪農に対して、農業に対して、また食品関係、工業関係というのもありますけれども、では自由にやらせて、そして最終的になる中、その基礎研究というものは今の段階で非常に先細りしているような、本当に私のイメージでしかないですけど、実はそんなことないよという話かもしれませんけれども、先ほど言ったような哲学を研究していきますと、そうした中で、多分途中で国語の先生になると思うんですよ。最後まで行くのはごく僅かで、途中で夢を諦めて、そして絶望じゃないですけども、次の人に、子供たちに託そうというふうな形になってしまう。

それで、最終的なところまで行く人は本当にごく僅かで、そうやってくると、その中で研究していくような人たちがいなくなれば、世界の哲学の情報をキャッチアップすることすらできなくなると思うんですよ。そうってしまったら日本の平和を維持する人、支えている人たちというのはいなくなってしまうのではなからうかと、そういうふうな気持ちもあるわけです。

ですので、そういう全体的に多様性を望むのであれば、その出口というのであれば、生活を最後まで支えられるようなそういう環境を我々が全体でつくってあげられるかどうかということ、もう国レベルの話になってくるんですけども、そういうことを考えないといけないのではなからうかというふうに思っております。

矢野委員長： ありがとうございます。  
他にはいかがでしょうか。  
最初は里見さん。その後で藤田さんということでお願いします。

里見委員： ありがとうございます。  
地域との連携のことですけれども、地域と連携した活動で、これを課外活動から単位認定にしていくという案といいますか考え方がここに示されておりますけれども、これはすごく大事だと思っていて、すばらしいと思うんですね。学校全体で地域連携ということに関心が向いて

くる一つのきっかけになるのではないかなというふうに思います。

その結果、この資料の43ページの信愛学園浜松学芸高校と事例が示されていますけれども、こういうすばらしい活動に結びついてくる事例がたくさん増えてくるのではないかなというふうに思うわけですね。

このときに、もちろん仕組みづくりということも大事なんですけど、やはり学校側からポイントとして、生徒の自主性、自分たちで考えて何をしていくんだと。特に地域との関わりの中で何が課題でどうしたいのかという自主性に任せるという環境づくりができれば、ますますもってこれは効果が上がるのかなというふうに思いました。

これが1つと、もう一つはコーディネーターですけど、やはり地域と学校と考えた場合、コーディネーターの存在というのはものすごく大きくて、ここにも示されているとおりでと思うんですけど、このコーディネーターを考えたときに、人口集積地域における都市部と、それから過疎化が進む郡部とはちょっと一律じゃなくて2つの視点があるのかなというふうに思いました。

例えば都市部では、報告書にもありますけれども、外部の専門人材、人間間で情報を共有する場を設置して、好事例を共有しながらそれを広げていく。こういう人たちがそれを受け止めて活動に結びつけてくれる人たちが多分いると思うんですね。

一方、郡部では、ここは非常に難しく、私も出身が伊豆の郡部といえますか過疎地なもんですからつくづく思うんですけど、もし学校と地域を結びつけるということを考えた場合、ピンポイントで人選がすごく大事になるのかなというふうに思います。

人物次第ですから、まず1に人選が来て、それから2にミッションを共有する、それから3である程度標準化した、例えば行動指針を示していくというようなことが必要かなというふうに思います。

人選について考えた場合、例えば県内にたくさん支店のある金融機関なんかがありますよね。そういうところと提携しまして、金融機関にはお金の情報だけじゃなくて、地域の経済だとか人の情報がたくさん集積されていますので、そういう金融機関から人選を紹介してもらうとかということも考えられるのかなというふうに思いました。

いずれにしても地域があって学校が存在するわけですし、地域の経済が回らなくなり、どんどん縮小していけば学校の存在もなくなるでしょう。そうするという事は、要するに官も民も職を失うということに究極つながっておるわけですし、地域を発展させていくということはものすごく大事なことだとなつくづく思います。

以上です。

矢野委員長： 大変重要な視点の御指摘であったと思います。ありがとうございました。

藤田さん、お願いいたします。

藤田(智)委員： すみません、話がちょっと戻ってしまうところもあると思うんですけども、今まで話をしてきた中で、例えば新しい時代に対応したとか、多様な学びだったり多様な人材という言葉がすごく出てきていると思うんですけども、では、多様なもの、「多様性」って一体何だろうと考えたときに、あまりイメージがつかないなというふうに思って、「新しい時代」だったり「多様性」だったりという言葉はとても耳触りがいいように聞こえるんですけども、とても曖昧で都合のいい言葉としてここで使われているのではないかというふうに思いました。

例えば多様性、多様な学びっていろいろあると思うんですけども、スポーツ一つ取ったとしても、大体学生時代にスポーツに関わるとしたらプレイヤーが主だと思うんですけども、先ほどの片野さんの話でもあったように、1つのものでそのスポーツが成り立っているわけではなくて、農業とかもそうだと思うんですけども、マネジャーだったり、コーチだったり、トレーナーだったり、いろいろなスポーツには関わり方があるのに、プレイヤーに集中する傾向があったりすると思うし、あとは言語学一つ取ったとしても、英語、中国語はとても学ぶ機会が多いと思うんですけども、その他の、例えば韓国語だったりロシア語だったりいろんな言語があるのに、高校、中学では学ぶ機会というのはあんまり少ないと思っています。

あとはジェンダー的な話もありましたけれども、多様な学びの中で、ちゃんとジェンダー・イクオリティーに触れていくのか、ジェンダー的に多様な学びも実現できるのではないかというふうに思っていて、「多様な」とか「新しい時代」とか、そういったところの解像度をもっと上げて行ってほしいなというふうに思っています。

以上です。

矢野委員長： 大変大事な点の御指摘だったと思いますね。多様性と画一性という問題が対立して多分ある考え方ですけど、どこに線を引くかですね。どういう事例があるのかということを確認していかないと、なかなか皆さんの共感を得られないかもしれませんね。

どうもありがとうございました。

どうぞ、渡邊さん、お願いいたします。

渡邊委員： こんにちは。三島からお話をしております渡邊でございます。

先ほど地域と学校というお話がございましたけれども、この地域というのを私は、それぞれ皆さんの考え方が違うと思いますが、地域が豊かでないと豊かな教育は育たないと思います。

それで、地域という点でこの静岡県は、気候的にも山紫水明にも恵まれ、照葉樹林の豊かな山に恵まれ、豊かな漁業が盛んな海に恵まれ、そしてすばらしい日本一の富士山に恵まれています。この自然について静

岡に住む人、または静岡に来る人、それから若い子供たちに教育するということが私はものすごく大事だと思います。

それで、私も東京から静岡のこの自然環境に憧れて、もう静岡に住みついて55年になりますが、この前、このところちょっと東海道を西から東へ走ることが多くて、そして実は愕然としたことがあります。それは静岡の山が死んでいるということです。

静岡の山は緑の豊かな照葉樹林、特に雑木が多いですが、カシとかクヌギとかそういうような大きな葉っぱで、そこに太陽をいっぱい受けて、それが木の葉になって大地に落ちて、大地から肥料が海に流れ、そこにプランクトンがたくさん密集して、魚が集まり、そこで大漁になる。つまり、照葉樹林がなければ海も枯れる。静岡県の自然保存は県が、地域に住む人たちが責任を持たなければいけないと思います。

現状では、山の裾の方がほとんど竹に占領されています。竹は土地を痩せさせても決して豊かにしないです。それは竹は手入れをしなければいけないんですけれども、手入れをしないまま放ってあるものですから、もう竹に食い荒らされてあのままだと静岡の山が死んでしまいます。もうひどいものです。

ある1つの事例を私は紹介したいと思いますが、福岡県もそういう環境にあって、海にプランクトンが減って魚が減った。その中である大学教授が指導しまして、高校生にまず山の竹を切らせた。その竹をどうしたか。竹を使う方法はいろいろありますけれども、それをやぐらに組んで海の底に埋めたんですね。そうしたらそこにプランクトンが発生して、そして魚が集まって、漁業が豊かになったという、それを高校生がやったんです。

皆さんも道路から、ただ車で走るだけじゃなくて山を見てください。山が竹林でもって荒れているというのは、地域の人が地域を生かそう、この静岡を豊かにしようとしめないのかも。この会は才徳兼備ですけれども、豊かな自然に各人がそれに対して感謝し、自然を守ることによって徳が生まれると思います。自然が乱れるというのは人間の徳まで枯らしてしまう。それは地域の人が考えなければならない。子供たちにそれを教えるべきだと思います。

それで、福岡県の問題じゃないですけれども、やろうとすればできます。まず山を生かして緑にする。それは、高校生になったらもう力がありますから、のこぎりも使いますし、おのも使います。それから、いろんなものを組むこともできます。各地域で高校生がそういうもので、おらがこの自然を守ることによって、結局、山にキノコが生え、山が豊かになり、また海で魚が捕れるようになり食文化も豊かになる。そういう総合的な土地への恩恵に対して地域の人が報いる、それが私は徳につながると思います。

頭でっかちになっては駄目だ、体を使うことが必要だと思いますけれども、いかがでしょうか。

矢野委員長： 大変すばらしい御意見をいただきました。ありがとうございました。  
高校生たちも自分たちが人から学ぶというだけではなく、世の中に  
どういう貢献ができるかという視点も必要だということがあって、その  
すばらしい事例としてお挙げになったんだと思うんですね。それはぜひ  
この1年間で論議を深めていきたいなというふうに思います。  
ありがとうございました。  
それでは、皆さんの御発言、切りがないと思いますが、また後で総合  
的に全体を振り返る時間もこの後つくってありますから、そこでまた、  
特に今日まだ御発言のない方にはぜひともお話をいただきたいと思うん  
ですけど、その点私からお願いしておきます。  
ただ今までいただいた御意見は、今後具体化していくということであ  
りますし、小委員会の最終報告につきましては、3月24日に総合教育会  
議がありますので、そこで報告をさせていただきます。  
小委員会につきましては、来年度も引き続き池上委員長の下で議論を  
深めていただいて、具体的な御提案をいただければ幸いです。  
よろしく願いいたします。  
それでは、続きまして、本年度の実践委員会及び総合教育会議の議論  
を踏まえた意見交換に移ります。  
知事にはいつも総合教育会議の場で実践委員会の意見を踏まえた提案  
をしていただいておりますので、改めてお礼を申し上げます。  
実践委員会での議論は、議論のための議論であってはならないと思っ  
ています。たとえ小さいことでもいいから、たとえどこかの1か所でも  
いいから、実行できるかどうかということが大事なことだと思っていま  
す。いろんな制約もありますが、それについては今後皆さんと協議した  
内容を一つ一つ実行していくことになると思います。  
今申し上げた本年度協議した事項の対応状況につきまして、事務局か  
ら説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。  
資料は、お手元の資料5、それから資料6、それと参考資料の3点に  
なります。資料が多くて恐縮でございますが、資料5を御覧ください。  
本年度の実践委員会と総合教育会議では、多くの御意見をいただきま  
した。主な御意見につきましては、改めて資料5という形でまとめてご  
ざいます。1ページから10ページまでにまとめてございます。時間の関  
係もございますので、具体的な説明は割愛をいたします。  
本年度の協議事項の対応状況につきましては、別冊の参考資料という  
ことでまとめておりますけれども、こちらにも主な成果について御説明を  
いたします。  
資料6を御覧ください。  
資料6に沿って御説明をいたします。

初めに、1の「ICTを活用した教育の推進」でございますけれども、総合教育会議での御意見を受けまして、教育委員会におきまして「ICT教育戦略室」というものを設置いたしまして、ICT教育に関する施策を進めてきております。来年度は、図にありますように、さらに体制を強化いたしまして新たな計画の策定も含めて取り組んでいくこととしております。

ICT教育に関する具体的な取組といたしましては、(2)にありますとおり、タブレット端末の整備ですとか教職員研修の拡充など、ソフト・ハード一体的に進めていくこととしております。

続きまして、2の「高等学校教育の在り方」では、教育委員会におきまして、先ほどもお話がありましたとおりモデル校を選定いたしまして、普通科改革ですとか新学科等の具現化に向けた研究などに新たに取り組んでいくこととしております。オンリーワン・ハイスクールという形で呼んでおります。

その中でも、下の図にありますように、グローバルハイスクールと呼んでいます地域協働による研究につきましては、本年度の才徳兼備の人づくり小委員会の提案も踏まえまして、その図にありますように、住民、企業、あるいは大学等と連携した授業の実施に向けて協議会を設置するなどの取組を進めていくこととしております。

加えまして、次のページに行きまして、(2)にありますとおり、産業界、あるいは大学の高度技術者ですとか研究者の招聘等による技術・技能の習得など、産学官との連携強化による実学の推進を図っていくこととしております。

次の3の「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」では、新たな学びの場、学び直しの場である県立の夜間中学、ナイト・スクール・プログラムと呼んでおりますけれども、これについて令和5年4月の開校を目指して、来年度は基本方針を策定することとしております。

最後に、4の「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」では、高校生を対象にした演劇スクール「SPAC演劇アカデミー」を開催する。それから、県立高校の演劇専門教育の実践的研究などを行うこととしております。本日は、お手元に「SPAC演劇アカデミー」のチラシもお配りしておりますが、既に生徒の募集を行っておりまして、本日までが応募の受付期間となっております。

この「演劇の都」づくりにつきましては、後ほど宮城委員からもお話をいただければと思っております。

資料の説明は以上になりますけれども、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響下でICTを活用した学習環境の整備が急速に進んだこともありまして、実践委員会ですとか総合教育会議でも「ICTを活用した教育の推進」ということで多くの御意見をいただきました。

本日は、ICTを活用した取組につきまして、学校現場の生の声を聞

いていただく機会を設けることといたしました。先進的に取り組んでおられる掛川西高校の吉川先生にお越しいただいておりますので、これから「ICTを活用した教育の先進的な取組」について、御説明をいただきたいというふうに思います。

それでは吉川先生、よろしく願いいたします。

吉川教諭： それでは、よろしく願いいたします。

静岡県立掛川西高校で世界史を教えております吉川牧人と申します。

本日は、「ICTで生徒と社会をつなぐ」というタイトルで発表させていただきたいと思います。

本日は、このような5つのテーマでお話をさせていただきたいと思います。

まず最初は、掛川西高校の新型コロナウイルスによる臨時休業対策についてです。

4月の臨時休業に対して掛川西高校では、全ての授業を時間割どおりに授業動画を配信することで学びを進めることにしました。その際の柱となったのが、本校校長のミニマムスタンダードでいこうという言葉です。これから初めてICTに取り組む教員にもやってみようと思わせる配慮した呼び掛けにより、全員が一丸となって挑戦することができました。

4月13日、臨時休業がスタートすると、早速地元コンサルタント企業、あらまほしの協力を得て職員研修を行い、動画撮影の具体的なワークショップを開きました。不安を感じていた教員たちも安心し、教員たちがそれぞれのアイデアを工夫しながら授業動画づくりにチャレンジしていきました。

その結果、臨時休業中に1,000人の全校生徒に対して全ての授業で時間割どおりに授業動画を配信することができ、生徒の学びを継続することができたのです。公立高校でこれまでに整備された通信環境を生かせば、どこの学校でも同じような対応が行えると思います。

次は、臨時休業後の私の授業の取組を紹介したいと思います。

2年生、世界史Bの授業です。世界史でイスラムについて教えるページがあります。日本人では縁遠い話で、いまいち生徒にも私にもぴんときません。もっと生き生きとした授業はできないのかと考えるようになりました。

今、御覧いただいているこの写真は、県のグローバル人材育成事業で3年前に行かせていただいたインドネシアの国立高校の朝の礼拝の様子を撮影したものです。このとき私は、文化の違いに対する大きな衝撃を受けました。この感動、ライブ感を世界史の教室に持ち込みたいと考えました。

この写真は、11月、教室とインドネシアの3人のムスリムをZoomでつないだ様子になります。本物のムスリムから話を聞くということ

で、生徒は最初は非常に緊張していました。インドネシアのショッピングモールの礼拝所や、家庭での日常の礼拝の様子を撮影して説明してくれました。生徒たちは初めて見るイスラムの家庭に驚いていました。授業で扱ったイスラムの信仰が現実社会でどのように繰り広げられているのかようやく実感できた瞬間だったと思います。

次に、私がどのような過程で今のような授業をするようになっていったのかということをお話しさせていただきたいと思います。

私が教壇に立って今年でちょうど20年目ですが、その半分以上は部活中心の教員生活でした。女子バレーの指導に熱中し、指導経験はなかったものの、県で優勝を目指して全国の強豪校を回る日々を送っていました。

授業の形は典型的なチョーク&トークで、教員から生徒に知識を一方的に伝える形をずっと行っていました。教壇の上で話し続け、眠たくなった生徒を叱り、毎時間小テストを印刷して問題を解かせ、その採点に追われていました。今思えば自分が学生時代に受けた授業を再生産していたんだと思います。授業よりも部活の指導が優先となり、放課後からが本番という生活になっていました。そして、このような状況に全く疑問を持っていませんでした。

そして、大きな転機が訪れます。掛川西高校に転勤する少し前、同僚の先生からお古のiPadを饞別に頂きました。iPadを頂いたもののは実はあまり積極的な思いではなく、スマホにしたのも一般の方々よりも遅く、テクノロジーに疎かった私には使いこなせるか心配な道具でした。

けれども、実際にiPadを触ってみたときに簡単に使えることに驚きました。これなら授業でも使える。今まで世界史の授業で見せたかった画像や映像を簡単に見せることができる。目の前が開けたような感覚をしたことを覚えています。

そして、掛川西高校に赴任をして少しずつですがiPadを使う生活が始まりました。その頃、掛川西高校ではアクティブ・ラーニングをやっているというマインドが共有され、様々な研修を通してチョーク&トークの授業が少しずつ生徒にとって主体的・協働的な授業に変わっていきました。

また、世界史の舞台を回ろうと世界を旅するようになりました。旅の中で授業の教材づくりを行ったり、海外の学校を視察したりと私の中の視点が徐々にグローバルなものになっていきました。

そして、世界の高校生の笑顔に触れるにつれ、この笑顔を日本の教室の生徒とつなぎたいと考えるようになりました。Zoomを使ってオンラインミーティングを海外の学校としたり、一緒にプロジェクトを行ったり、オンラインでワークショップを開いたりしました。こうしてICTを用いることで私の授業スタイルは生徒にとってアクティブなもの、そしてグローバルなものに変わっていったのです。

掛川西高校では、地域と連携した地域課題の探究を行っています。臨時休業中に生まれた主体的・協働的・創造的な探究の事例を紹介したいと思います。

臨時休業中の総合的な探究の時間として、副市長と代表生徒がオンラインでミーティングを行い、掛川市の地域課題についてディスカッションする、その様子を動画で配信するというを行いました。

その中で、地域のコロナ患者の受入れの拠点となっている医療センターのことが話題に上がりました。生徒からの医療センターについての質問に対して、副市長の答えは、まるで戦場のような状況だというものでした。これに生徒たちは奮い立ち、オンラインで応援メッセージを集め、動画に編集し、5月28日、中東遠総合医療センターの壁面に応援メッセージを投影することになりました。これはICTを用いて生徒が主体的に社会に貢献しようとした事例になりました。

ニュースを御覧ください。画像で少し説明しながら見ていきたいと思っています。

こちらが中東遠総合医療センターなんですけれども、壁面に高校生が編集した動画が流されていきました。休業中だったので全てオンラインで集めた映像になっています。総合医療センターの方々が見てくださって、本当に涙を流してこの映像を見てくれたということで、非常に高校生とってもこのニュース映像を見て刺激になりました。

次は、臨時休業中に行った学習評価の取組について紹介したいと思います。

臨時休業中には、動画の配信の最後に、必ず毎日全生徒に帰りのショートホームルームと称したアンケートを行っていました。1時間の授業ごとに理解度や質問、学びの内容などを、生徒はグーグルフォームで回答し、翌日には全教員にそのデータが共有されていました。このような生徒自身が学びの振り返りをきちんとすること、そして教員がそのデータを共有し、次に作成する動画授業の改善に活用することができました。ICTを用いて生徒と教員のやり取りを即時に効率的に行うことで、授業改善に役立てることができるので、今後とも継続してやっていきたいと思っています。

なお、ここまで紹介した取組については、動画配信サイトを通じて情報発信しており、また県教育委員会が主催する各学校の取組を紹介するワークショップにも出席して、学校、教員間での情報共有や連携も進めています。

ICTは生徒と社会をつなぐものだと思います。今までの学校教育は生徒を抱え込む傾向があったのではないのでしょうか。学校の中に生徒を閉じ込め、既存の知識を一方向的に教育することだけでは限界が生まれてきたのではないかなと感じています。今回紹介した事例のように、ICTが生徒と全世界を双方向でつなぐことで生きた学びをつくり出すことができると思います。

現在の生徒が理想の未来へと続くプロセスの中で、生徒が学び、経験し、成長していきます。これは生徒だけではなく教員も同じだと思います。生徒や教員を社会へとつなぎ、未来の変革者へとつなぐプロセスをより大きく羽ばたかせる翼こそがICTの役割なのだろうと思っています。

御清聴ありがとうございました。

矢野委員長： 大変すばらしい事例の発表をいただきまして、先生、ありがとうございました。

さて、それでは皆さんにいろいろ御意見を伺いたいと思いますが、今の掛川西についての御質問も含めまして、先生、まだしばらくいてくださいね。

その前に宮城さん、SPACのお話をしていただけますか。

宮城委員： 改めまして、宮城です。どうもありがとうございます。

最初に御紹介いただいた総合教育会議の議題にも、いきなり頭に均一性や同一性を求める教育だったのを変えて、それをリセットして、出る杭をいかに多くつくるかという教育に変えていくという。このテーマ、命題、これこそまさに僕自身が芸術、あるいは演劇を使って何がしか若い人たちに貢献できると思っている、まさにその中心なんですね。

芸術というのは、繰り返しますけれども、前も申し上げましたけれども、人と違っているということに価値があるという世界です。今まで、この30年間、日本がもうひとつ伸び悩んだのは、やはり人と違うことを考えるということをあまりよしとしなかった。教育現場では、人と違うということにあまり価値を置けなかったからなのではないかと。人と違うことを考えるって、すごい面白いことなんだよ、すばらしいことなんだよということを伝えていけば、別に芸術に限らず、様々なジャンルで活躍する若者がどんどん登場していくんじゃないかと。人と違うことを考えるためにも、世界がいかに多様であるかを知ってもらう必要がある。

我々の周りに人間のバリエーションがどんどん減っている。これは、僕の子供の頃と今の例えば高校生と比べても、僕の高校時代の方がまだ周囲にいろいろな人たちがいました。僕の小学校時代だと、もっと、単純に言えば日本が貧しかったわけですが、本当にいろいろな大人たちがまだ目にすることができたんですが、今、あまり幅が広がらないですね。子供たちが目にする大人たちの幅はさほど広がらない。だから、まず世界にはいろんな人がいるんだということを知ってもらう必要があるだろう。本当に我々の周りで見える範囲というのは、すごくわずかで、世界には本当にたくさんのいろいろな幅があるんだということを知ってもらいたい。

演劇というのは、割合世界を見る窓になり得るツールなんですね。演劇は、時間軸とそれから東西、空間軸、両方に対して窓になってくれ

る。過去の人が何を考えたか、それから今僕らがいる場所じゃないところにいる人が何を考えているか。これを知るツールになるんですね。世界を知る窓になる。若い人たちには、ぜひ演劇がそういう世界を知る窓になる機能をうまく活用してもらいたい。

SPACとしてできることから始めたいと思ひまして、ここで御紹介いただいている演劇アカデミーというのを来年度から始めたいと思っています。

演劇アカデミーは、県内とは限らないですが、県内の高校生に週3回SPACに来てもらうというものです。県内でもちょっと遠い子たちは、ウィークデーは大変かもしれませんが、週末の授業には必ず足を運んでもらう。ウィークデーに2回と週末、週3回授業を行って、授業というと、ちょっとイメージが限定されるかもしれませんが、実際、ウィークデーの授業をミュージカル映画で英語を学ぶという授業と、それからリベラルアーツと、この2コマです。その週2コマは、遠隔でもZoomでも受講できるようにして、土曜日もしくは日曜日に必ずSPACに足を運んでもらって、創作の現場に立ち会ってもらう。

SPACには、幸い世界のトップを走っているアーティストたちが集まっていますので、そのSPACの俳優ばかりじゃなく、海外から来る演出家や俳優たちにも出会えますので、こんな大人がいるんだという、これは、前も言ったことですが、これでもいいんだという言い方をしてもいいと思うんですが、これでもいいんだ、これでも何とか生きていく場所があるんだという、そういう例を実際に見て、触れ合って、そして直接話ができたりする。その高校時代を過ごすことによって、僕が何より大事だと思うのは、そういう仲間ができるということですね。同じ年代で、全然学校は違うかもしれないんだけど、刺激を受け合っている友達ができ、その友達同士がさらに刺激を与え合う、そういう関係ができていってこればいいなど。

僕は、ついこの間、新聞にも書いたんですけど、芸術の世界においても、この演劇の世界においても、今の日本はコスパ至上主義のようなものがはびこってきているんですね。つまり回り道をしてはいけないという。なるべくさっさと効果が出るように、成果が出るように。だから、今、演劇系の大学に入った学生は、もう大学在学中から頭角を現すことに必死になってしまうんですね。それは若いうちから世に出れば、一見華やかでいいんですが、しかし長もちするのは難しいですよ。20代から世に出てしまうと、40代以上で活躍するのは難しい。もう、これは現実にそうです。アーティストの世界は間違いなくそうです。

ですので、僕としては、このアカデミーにおいては、そのコスパ至上主義を廃止したいと。回り道をしてくれと。高校時代にはこうやって世界の超一流のアーティストと出会って、友達と刺激を受け、そして英語もできるようになって、高校卒業後の数年間は世界の多様性を知るために使ってほしい。二十歳ぐらいでそのアウトプットをする必要はなく

て、インプットに時間を使ってくれ。二十歳前後の大学ぐらいの頃は、なるべくインプットに時間を使ってくれ。そして、もしその上でやっぱり私は演劇を表現する側に回りたいたいよと思ったら、20代の半ばぐらいで改めてSPACなりに加入して、表現者の側に回ってくれればいい。そうすれば、きっと40代、50代になっても燃え尽きることはない表現者になることができるだろう。僕はそのようなことを思っております。

チラシの方が入っていますので、今日が締切りですので、大体お互いが刺激し合える人数というと15人ぐらいかなと。全員の顔がよく見えて、お互いが刺激し合える人数とすると、15人ぐらいかなと思って、1年で完結する授業を15人ぐらいで行いたいなと思っております。

矢野委員長：　すごい世界があるんだなと、つくづくお話を伺って感服するばかりです。

それでは、星野さんお願いします。

星野委員：　吉川先生、ありがとうございました。

実は、教育関係の全国展開している全国誌等では、ICTが進んでいるということで、4校ぐらい取り上げられる中で、吉川先生と私たちの学校が取り上げられて、50%が静岡の学校なのに、いつかお会いしたいなと思って、今日お会いできたので、後ほど、お昼にお時間頂けたらと思います。ありがとうございます。

今、アクティブ・ラーニングとかいろんなお話が出ました。実際、主要5教科という表現が、これから文科省の判断なんて待っている場合じゃないんですけれども、だんだんと薄れていくのではないかなと思っています。

学校が再開したとき、学校教育の何が一番尊かったかということ、主要5教科以外のところの学びですね。それは、体育だったり音楽だったり技術・家庭だったり、5教科ですけど理科の実験だったり、あとは学校行事、そういったリアルなところというものが再認識されました。ただ、学校現場としては、主要5教科という言葉があるぐらいなので、なかなかその人たちに気兼ねしてなのか、あまりそんな表現をする人はいないんですけれども、これはもうリアルな私の私見であり感想です。

先ほどもアクティブ・ラーニングとあると、わいわいがやがやということではなくて、これは欧米の友人が交流している学校が来ると、日本の学校というのはチョーク&トークで、みんな同じ方向を向いて、かりかりノートを取っていると。これは整然として素晴らしいと言っているんですが、実際は不気味だと言っていました。その後、酒を飲んだときにですね。というところで、アクティブ・ラーニングと。せっかくリアルな世界で一緒にいるから。

あとはピア・インストラクション・ラーニングですね、PILと呼ばれるもの。これは、大学のゼミのような対話型の授業。あとPBL、プ

プロジェクト・ベースド・ラーニング、もしくはプロブレム・ベースド・ラーニング。これは先ほどの民間企業の方と色々な課題解決をするとか、そういったこと。どんどんやっていくべきだと思っています。

一方で、先生がもうティーチャーでは足りなくなっていると思います。ティーチングは、実はリモートの授業でできてしまう。知識習得なんていうのは、もはやユーチューブで教えるのがうまい大学生とかがいっぱいいるわけですね。本当に自分で動く主体的な子はユーチューブを見て勉強しています。自習ですね。

そういったところなので、これからはまずコーチングができなければいけない、教員が。導く力です。あとメンターでなきゃいけない。個別対応がしっかりできる、個々の能力を伸ばす力とか、心理学も当然学ばなければいけない。あとファシリテーター、全体の今日のような会合のところも、しっかりそこを回す力だったりとか、掛け算にする力、こういうことを本来大学の教育学部等も、例えば静岡県内は、国公立、私立、関係なく連携して、そういったことを先んじてやるとか、そういう人材育成。よって、教員志望者は、逆に静岡の大学へ行くと特別なことがあるぞと、本当に生かせる教育があるぞとか、そんなこともやっていただけたらと思います。

ちょっと、私どもの学校の宣伝になってしまいますが、皆さんにぜひ本当に使っていただきたいと思っている人材の紹介をしたいんですが、東京で一番ICT教育がここ数年進んでいて人気校になっています三田国際学園という中・高等学校があります。そこの30代で教頭をやっていた牽引役の田中潤という教員がいるんですが、おかげさまで縁があって、この4月から数年間、静岡聖光にヘッドハンティングで来てもらえることになりました。私学協会の方には、もう研修等で使い倒してくれということを行っています。ぜひ私立・公立関係なく、どんどん外に出したいと思っています。吉川先生、またぜひ日本一のICTが進んでいる学校になる可能性が、私と吉川先生と田中潤がいれば、本当に実現できると思いますので、かなりの有名人をヘッドハンティングしてきましたので、ぜひと思っています。

最後に、何か宣伝ばかりになってしまったんですが、一番嫌がる質問かもしれませんが、いろいろ教育委員会の方も視察に来ていただいたりして、いろいろなお話をさせていただきました。本当に皆さん、熱心です。本当に教育に対して熱い思いがありまして、また小学校、中学校のいろんな教頭先生ともお話しする機会がありました。本当に皆さん、一生懸命なんです。ではなぜ吉川先生が最初におっしゃっていた、このやり方とこのインフラがあれば、どこでも全面展開できますと。今回、掛西さんと私たちが一点突破したのになぜ全面展開できないのか。これ、多分私ガバナンスの何か課題があると思うんです。誰も悪くないですね。多分、先送りしたりということができてしまう何かガバナンス、もしくは間に人がいなくて、プロデューサーがいない状態になって

いるとかあると思うんですが、大変答えにくいかもしれませんが、何で全面展開できなかったか、仮説で結構ですので、教えていただけたらと思います。お願いします。

すみません、長くなりました。

吉川教諭： ありがとうございます。よろしく申し上げます。

なぜできなかったのかというと、ちょっとネガティブな感じなので、うちがなぜできたのかというところで、少しお話をさせていただきたいと思うんですけれども、一つは、校長のリーダーシップだと思います。確固たる意思でこれをやるんだという宣言と、それは生徒に対してもしっかりと説明をしてくれたということが大きいなと思いました。

あともう一つは、カリキュラムマネジメントが大きいと思うんですけれども、本校では、今の校長が来てから1年間かけて教員に対して何度も何度も研修を重ねて、掛川西高校でどんな生徒を育てたいのかというのをかなり綿密につくり上げました。それに照らし合わせて、今回の休業を考えると、やはり我々がやるのはこういうことなんだという目線が同じだったということが非常に大きなところなのかなと思っているので、恐らくそこはガバナンスのところと関係があるんじゃないかなと思います。

星野委員： ありがとうございます。

吉川先生のお人柄がよく分かりましたけれども、私すごく悔しいというか、悲しい思いをしたのが、私立だからできるとか、トップリーダーの決断力があるからできるということと言い訳している人がすごい多いなと思って、そこをガバナンスとかマネジメントで何とかするのが管理職の仕事というか、教育に携わる人間の責務だと思っていますので、ここは本当にポジティブだけではなくて、しっかりと何がボトルネックになっているとか、そういったところを本当に考えてほしいです。私たち大人のことではなくて、未来がある子供たちに対して、大人の事情で停滞するなんていうことは、今後あってはならないと思います。

今、中学1年生、2年生と毎年面談するんですけど、昔は男子校だったので、無邪気に、僕はとにかくビッグになりますみたいな、根拠のないことを言う子が多かったのですが、この数年、本当に安定して、平和に暮らせればいいという子が増えています。これはまさに失われた平成30年間で私たち大人が楽しそうにしていなかったからです。これを変えていかなければいけないので、これはもう大人同士の気遣いではなくて、むしろ子供に対して未来をどうつくっていくかという熱意をぜひ皆さんで本気で考えていただければ、これは一気に静岡が教育ナンバーワンになれると思うんですよ。ぜひに皆さんでまたお力添えいただけたらと思います。

すみません、長くなりました。以上です。

矢野委員長： 大変、心強いお話をありがとうございました。  
白井先生は、大学におられてお感じになることがあれば、一言お願いします。

白井委員： ありがとうございます。ぜひ、三田国際の田中先生と星野先生と吉川先生のコラボで、全面的に後押しするような環境が必要なんだろうと思いました。

大学でということ、幾つか。大学として共感しましたのは、高校ということと言うと、スーパーサイエンスハイスクールがありますが、どうしてもスーパーサイエンスという言葉が理系をイメージさせるもので、ソーシャルサイエンス、社会科学だったりとかヒューマンサイエンス、人文科学もある中で、いかに今後、いわゆる人文系、社会系のサイエンスを高校にも、あるいは大学と連携したり、地域だったり企業、産業と連携しながら大学も一緒になって入っていくかというのがとても大事なんだろうと思いました。

例えばバイオで研究をしていくときにも、生命倫理的な姿勢や生命倫理の知見は必要ですし、例えば考古学をやるという中でも、文理融合的な発想が必要だったりとか、ビジネスの世界でも経済学的な視点だったりとかが必要なので、そのサイエンスの中に人文社会をどのように入れていくかというのが一つ課題になっていくと思いました。静岡県内の高校のモデルスクールづくりという中でも、大学の人文社会系がどのように入っていくのか。人文社会だと、リベラルアーツとか歴史とか文化というような見方だけではなくて、サイエンスとして積極的に入れていく必要があるというふうに思いました。

それから、冒頭のところで他の委員がおっしゃいましたモデル校の中に特別支援を入れていくというのは、ものすごく大事なことだと思います。高校の特別支援の資料を拝見しましたがけれども、ぜひ次年度考えていきたい視点というのが、いわゆる福祉的な視点です。その福祉的視点というのは、施すという意味での福祉ではなくて、当人をエンパワーメントする、当人を支える、応援するという視点です。このコロナ禍でも言われているような二極化とか福祉の問題とか貧困の問題とかありますけれども、施すというのではなくて、本人をエンパワーメントしていくという視点から、特別支援教育で当人をどういうふうに支援していくのか。そこに福祉的人材がどういうふうに入っていくのか。専門教育だったりとか、大学だったりとか、現場の福祉であったりとかが特別支援教育とどういうふうに関わっていくのかというのがとても試されることではないかと思いました。

ですので、その特別支援のモデル校にならなくても、一つその拠点を考えることによって、福祉的人材、福祉の見方、福祉的関わり、人を支える、支え合うということを実験していくといえますか、検証していく

プロセスというのがとても求められることではないかと思いました。

最後に、大学教員という視点を離れて、親の視点からなんですけれども、私は中学生、高校生、大学生の子供がいて、保護者として関わる中で、ぜひ保護者の人材バンクをつくってほしい。例えば、今回のICTであっても、私自身は授業動画を山のように作る人間で、もちろん呼ばれればというか、行ってよければ高校にも行きますし、こうやって授業動画を作るんだよなんていうこともお話もできると思いました。なかなかそういう機会がなかったので、保護者として関わるということができませんでしたが、前回、スポーツでの人材バンクのお話がありましたが、スポーツに限らず、ビジネスだったりとか、企業で開発を行っている方、理系の方、福祉人材、教育の方、様々な方が保護者にいるわけですから、いわゆるお手伝いの頭数として保護者を考えるのではなくて、きらきら光る人材として保護者を見ていただいて、保護者の人材バンクというのを持っていくと、地域社会という曖昧模糊としたイメージというのが、人材の宝庫に見えてくるのではないかなと思います。

特に、地理的にも近いところに人材の宝庫があるという視点から、ぜひ保護者の人材バンクというのをつくっていただいて、高校のみならず、小・中学校でも活用していくというのをお願いしたいなと思いました。

ありがとうございました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。

人材バンクのことは、何年か前からずっと話題になってきているんですが、しばらく遠ざかっていましたので、来年度はこの問題を少し深めていきたいなというふうに思います。

それでは、あまり残りの時間もないですけど、森谷さん、何か全体を通じて御意見があればお願いします。

森谷委員： 静岡ユネスコ協会の森谷明子です。

今日はきれいなお花でありがとうございます。

静岡県の教育がすごくいい方向に向かっているなというのを、今年この会議に参加させていただいて実感しまして、とてもありがたく思っています。

特に、高校という場所は、外からなかなか侵入しにくい場所で、先ほど吉川先生の方から困っていたというお話がありましたが、まさにそれで、私は中にも身を置き、外にも身を置きで、そういう立場でありながら侵入できない壁があったんですけれども、特に総合の時間の活用の充実によって、それがついに破られるときが来たんだなと、ついにこの日が来るんだという感じで、地域の人たちもこれだけスタンバってくれていて、本当に期待できる未来を感じております。

その一方で、この総合の学習のもう一つ大きな意味付けを与えてもら

いたいというのが、私がユネスコだからではないですが、心というところをもう少し大きく扱ってもらいたいなと思っているんです。

ちょっとその心のことについてお話ししますと、皆さん、御存じと思うんですけども、日本の子供、児童生徒の自殺率が先進国の中でナンバーワンなんですね。特に、どういう因果関係か詳しく分からないものの、スマホが出てきてからのこの10年がとにかくすごく跳ね上がっていて、そして下がる見込みがないというのが大きな問題となっているんです。大人の自殺もトップなんですけれども、これは経済状況が改善すると下がっていくというのが分かっているんですが、子供の自殺に関しては下がる見込みが分からない。つまり、この10年間、これといった対策ができていなかったということになると思うんですね。

さらに、幸福度調査というのが毎年国連で行われて、3月20日で、今年も5日後にあるんですが、これが大変低いというのも皆さん御存じと思うんですけども、子供対象の幸福度調査というのもユニセフで行ってしまっていて、これも恐ろしく低く、そして精神的幸福度、身体的幸福度、それからスキルの幸福度とあって、健康面とか身体的な部分は世界第2位なんです。なんです、精神的幸福度が、なんとワースト2なんです、世界の先進国の中で。この精神的な部分を丁寧に見ますと、とにかく自己肯定感のなさ、よく言われているように、自分を信じられない、自分を無価値だと思ってしまう、自分をみじめに思ってしまう。それから、他との関わりを持たない、他に感謝したり他とつながる、他とコミュニケーションを取る、あるいは、今度は逆に他とは違う尊い自分を確立する、あるいは困難にぶち当たったときに前向きに考える等のことができていない。つまり、心のそういうところが育っていないということになるんですね。

これは、総合の時間で地域の方々と連携したり、対話の学びをしていくことで、実はこれが全て解消されていくんです。したがって、私から見ると、この総合の学習が、教科の充実とか学習の向上とかキャリア教育とかいろいろありますけど、何といたっても心の安定に直結するまたとないチャンスであると思って応援していきたいと思っているんです。

今年、心のことについて審議されてきた部分は、私の記憶ですと資料5の7ページのいじめ、不登校についての問題を問われて、このくらいだったかなと思うものですから、ぜひ来年に、また引き続き子供の心のことを、心に特化した柱を持ってもらえるとありがたいなと。

一つの提案として、9月のZoomで、私、呼吸法による黙想のことを提案したんですが、ありがたいことに、静学の方で取り上げてくれまして、中等部なんですけど、3年次から実験的に呼吸法による黙想というのをやってくださって、来年度からはさらに広げて、学校関係の詳しい専門の方を呼んで、全体で研修して、心を整える取組をしていきたいと言ってくださっていて、ありがたく思っているところです。

そんな感じで心の方もどうぞよろしくお願いします。

矢野委員長： ありがとうございます。  
では、藤田さん、どうぞよろしくお願いします。

藤田（尚）委員： 今日もありがとうございます。

皆様それぞれのお立場でお話をしている中で、私も中小企業の経営者としての立場から教育についてお話をさせていただくと、今回というか、ずっとこの会議においては、今日、教育の出口とかゴールとかという話がありましたけれども、ではそれが何なのかというふうに考えたときに、才徳兼備の学生さんをしっかりたくさん教育することができて、そのゴールが何かとなったときに、じゃあその子たちが静岡でしっかりと活躍をしてくれるということを仮定するのであれば、1つ大きな問題になってくるのが、資本主義なのでどうしようもないんですけども、先ほどの片野さんのお話の中で、医学においては、目の前の1人を救うことができるお医者さんもいるけれども、もっとたくさん命を救っている研究者の方もいらっしゃるようになったときに、例えば私の周りでも医学に関わる方がたくさんいますけれども、優秀なのかどうか分からないですけども、ビジネスモデルとして医学をしっかりと稼げるビジネスにできる人と、夢をしっかりと語って、研究職でこういうことができるんだと言っている人が2人いるとすると、学生はどっちに振れてしまうかということ、もしかしたら今の段階だったら、先ほどの星野さんの安定という話もあったかもしれませんが、稼げる方を見てしまうかもしれない。例えばサッカー選手、今は日本代表選手は全部海外選手ですよ。では、何で海外に行くかということ、やっぱり稼げるからとなってしまう。となったときに、例えば静岡と東京でと比べたときに、どっちが稼げるか、どっちがいい仕事があるかとなったときに、どうしても優秀に育った人というのは、どうしても海外とか東京とかを見てしまうと。やっぱり私はまだまだそういう傾向があるというふうに思います。

したがって、何をやったらいいのかというふうに考えた場合に、その中でそれをも超えるような志だったりとか郷土愛だったりとか文化だったり自然だったりとか、確かに稼げるかもしれないけど、もっと静岡にはこんな素晴らしいものがあるんだよということを、これを進学校から普通、商業科までいろいろあると思うんですけど、全部の生徒さんにしっかりとその選択肢を与えて、静岡がこれだけ素晴らしいもので、あなたの持っている技術やあなたの持っている能力というのは静岡で発揮することで、こんなに素晴らしいことに貢献できるんだよということをしかりと教えることが一つなのと、もう一つは、同時に静岡が企業を育てていく、静岡に企業を誘致していく。例えば、トヨタがある愛知はやっぱり強いですし、マツダがある広島だって強いですし、それなりに静岡にある企業というものにしっかりと自分たちが学んだ後の出口として、静岡で活躍できる場が提供されているんだという、この一連の流れ

をしっかりと高校生に伝えて、それで静岡に夢を持ってもらうということが私は大事かなというふうに思いますので、今、循環として企業のこともそうですけど、じゃあ静岡の農業のことも全部含めてしっかりと循環をさせて、この分野でこうなって、自分の将来はこういうふうに着地ができるんだというゴールというのは、やっぱり自分の生涯がどう閉じていくのかというところまでを見せた上で、その過程の教育というものをしっかりと推し進めるべきなのかなというふうに改めて思いましたので、意見をさせていただきます。

矢野委員長： ありがとうございます。  
佐々木さん、お願いします。

佐々木委員： 本日の議論を聞いていまして、出口の議論ではなくて、もともとは本当は入口の議論をしているんだろうなというふうに思っています。要は、国際人として何を身に付けるべきなのとか、どこを目指すべきなのかというようなことを議論する中で考える力ですとか、発信する力だとか、そういったものをどう身に付けるべきだというときに、人とどう関わっていくのかというところを求められたんだろうというふうに思っています。

地域と社会、それから企業との関わりを通じて、先ほど世界を見る窓ということでしたが、そのきっかけの一つをどうつくっていくのかということだと思います。

その件に関し冒頭に星野さんが、なかなか企業とやっても、お付き合いでうまくいかなかったんだというお話がありました。ちょっと耳が痛いようなお話でございましたけれども、こういったことをやっていこうと思うと、先生の意識の改革も必要だと思いますし、親御さんの意識の改革もとても必要なんだろうというふうに思います。我々企業の中にも魂だとかが必要だと思います。関わるみんながどういうことを目指しているんだということの認識の一致がない限り、ことはなかなか進まないのです、その辺りを最初にしっかりとやっていくことが必要だと思いますし、企業の関わりでいくと、よくあるのが拠点が本社機能なのか、現場機能なのかというところで窓口を間違えて、何だ、やってくれないじゃないかとか、そういうことになってつまらないですし、子供たちが実際に自分たちで何かを勝ち取っていきなさいいけないんだというようなことを教える場所でもあると思いますので、どうやったら企業や地域を巻き込んでいけるのかとか、そういった目的を持たせてやっていく事業でもあるんだろうというふうに思います。

先ほど、だんだん核家族化してきて、我々の幼少期のときのようなコミュニティではなくなったと言われてました。このコミュニティの小ささがやはり自殺の多さにもつながっているんだろうと思います。興味のあることだとか、何となく面白そうな人がいるとか、そういったコミュ

ニティの入口をどう見つけるかということに価値があると思いますので、自らのコミュニティを多くつくるという目的のためにも、こういった活動を自主的にやっていっていただけの方がいいなというふうに思っております。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

皆さん、御意見ももつともつとたくさん持っていらっしゃると思うんですが、予定の時間がありますので、最後に知事から一言お願いします。

川勝知事： もう予定の時間がまいりまして、したがってもうこの実践委員会は来年度にも引き続けなければならんということでございます。

まずは、今年この小委員会というものが初めて設けられました。検討委員会から数えると6年目ぐらいになりますかね。この小委員会が非常に鋭角的にいろいろ活動していただきまして、それが総合教育会議にも生かされたということで、池上先生には厚く御礼を申し上げます。それから、またこの設置を提言していただきました矢野委員長には、改めて厚く御礼を申し上げる次第でございます。

今日は、富士山が私の右前方に見えておりまして、富士山には月見草が似合うと言った人がいましたけれども、実はここにお花、森谷さんが言ってくださいましたけれども、カーネーションですね、それからスイトピー、ガーベラ、それからバラ、それからコデマリがここにあります。どの花も似合うんですね。ですから、外来の花もあるし、これまでのように日本の花もあります。ですから、どの花も許してくれる、そういうふじのくにをつくると、これが多様性ということでございます。

先ほど、宮城先生が自分の子供の頃はとおっしゃいましたけれども、宮城先生は大体昭和30年代のお生まれじゃないかと拝察いたしますけれども、その頃、高等学校に行くのは2人に1人ぐらいです。ですから、宮城先生の子供のときの大人というのは、高校にも行っていない人が大半だったと思いますね。それが藤田さんとか星野さんは50年代じゃないですか。それで池上さんは30年代かな。そこから急に40年代になると80%になります。そして、藤田さんなんかは平成のお生まれですね。片野さんの頃は、恐らく90%になっていますね。藤田さんの頃には98%になっています。通信教育も入れてですけども。要するに、ほとんどの子が高校に行くということで、ですから同じようなことをみんなしているわけですよ。ですから、なかなか現場というか、宮城先生が言われた頃には、実は中学を卒業してもう社会に出て、いろんな経験を積んで、そして自らの出口といいますか、生きざまを確立している人がいるわけですね。ですから、そういうところに戻していくためにどうしたらいいか。

偶々こういうコロナということで、ICTというものが非常に有効であるということに気付いて、今日吉川先生にすばらしい御報告をいただきましたけれども、このICTという技術で御本人が変わったわけですね。御本人が変わり、生徒が変わり、世界観が変わったと。ですから、1人で変われないんですね。しかし、自らが変わらなないと、実は世界は変わりません。ですから、そういうきっかけはなるべく与えて差し上げることが極めて重要で、私は英・数・国・理・社のうち国というのは国語ですから別にしまして、英語、外国ですね。数学、これは基本的に自然科学の根本ですからヨーロッパ伝来のものであります。理科、これも自然科学、社会、ソーシャルサイエンスですから、向こうのものをずっとやってきたわけですね。そうしたものは、しかし向こうは向こうです。実は地についての学問なわけですよ。ヨーロッパにおける地についての学問として自然科学があります。そのようなものとして、私たちも地についてしっかりと自らが鍛えていかなくちやいかんと、これを実学といって、そのうちの一つ、例えば体を表わすと、森谷さんの絵画とか、あるいは宮城先生の演劇とか、それから星野さんのラグビーとか、あるいは里見さんの空手とかあるわけです。これで人格がくっきりと投影されていくわけですね。

しかし、トップになれないですよ、全てが。それは学問でも同じです。ですから、みんな学問をやれと言っているのは、それはむちゃくちゃな話で、なれやせんのです。しかし、その重要さを知ることが大切なんですね。学問の大切さを知ると、スポーツの面白さを知ると、芸術のすばらしさを知ると、そして、自分は無芸大食だと。だけど、芸術はすばらしいと。自分はスポーツはできないと、だけど応援するのは好きだと、そういういろんな自分の立場を築くまで時間がかかります。今度、稀勢の里、あの方は今30代でしょうかね、早稲田大学の大学院で修士を取りました。高校のときには恐らく相撲一辺倒でしょう。大学行ってないですよ。この間は桑田投手がやっぱり大学院に行って修士を取りました。大学へ行ってないですよ。高校はPLでピッチャーしかやっておらん。それが大学院で、今巨人軍という日本を代表するプロ野球のピッチングコーチです。立派な一人前の出口がそこにあるわけです。

ですから、中学卒業したくらいのところから、いろんな入口を知って、大体30代前半ぐらいまで失敗してよろしいと、寛容のある社会をつくっていく必要がありますね。ですから、失敗していいと。しかし、30代の前半ぐらいから、もう後は自分で出口は見つけなさいと。あとは自己責任ですというくらいの寛容さと、それといろんな試行錯誤ができるように。そして、その過程で多くの方々たとえにしを結ぶと。そのえにしやがて生きてきます。ですから、学校の先生とだけ、学校のクラスの友達とだけ、クラブの友達とだけというんではなくて、この370万いるわけです。そこに10万人が外国人の方もいらっしゃいます。しかも海外とも交流があると。そうしたいろいろなえにしをいろんな形で人生の節目

にもらっておくと、それが必ず生きてくるというふうになっております。人は一人で生きてはおりませんので、自分が変わり、同時に人が変わり、そして社会が変わっていくと。大体良い方向に持っていかうということで、地域というものに根差していないと、それこそ山が枯れるように地域が駄目になっていきます。山が枯れると海が枯れていくということでございまして、地についての教育をやるためには、大人全員が社会総がかりで地域ぐるみでやっていかなくちやならんということで、それぞれの自分の人生の職分といいますか、分に応じて後進を育てていくと、これほど大事な仕事はないというふうに思いますので、大人は子供に対して責任を持つと、そういう観点で、この令和3年度をすばらしいものにしていきたいと思っておりますので、今年度の御礼を申し上げますとともに、来年度もひとつどうぞこれまで以上によりしくお願いを申し上げます、御礼の挨拶といたします。

本日は誠にありがとうございました。

矢野委員長： 皆さん、ありがとうございました。

では、次の会議でお会いすることをまた楽しみにしています。ラグビーの話は、次の機会に御披露いたします。

それでは、事務局にバトンタッチします。

事務局： 長時間にわたりまして御審議いただきまして、ありがとうございました。

なお、来年度のこの実践委員会につきましては、また日を改めまして事務局から連絡させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、以上をもちまして、第4回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。

本日はありがとうございました。